

Language Attritionの研究

— 英語教育への応用可能性 —

深 沢 清 治
(1983年10月1日受理)

A Study on Language Attrition
— Applicability to English Language Education —

Seiji Fukazawa

Vast amount of time, energy and funding have been invested to the development of curriculum, materials, and methodology to further second language learning. With the recent trend of growing concern to the study of second language acquisition, we know quite a lot about its process: how people learn languages. Utilizing the research results of second language acquisition, we tend to consider second language learning solely as a process of acquiring a competence.

By contrast, little attention has been paid to the maintenance of these skills once attained and even less once they are no longer used. Error analysis, as a means of second language acquisition research, does not regard forgetting as a cause of errors. Countless individuals learning a second language cannot avoid forgetting their skills over time, but relatively little research effort has been addressed to the general phenomenon of language loss, or 'language attrition' and almost none to the systematic study of second language skill loss: the period of time it takes for skills to begin to decline, the order of specific feature loss, and methods of avoiding attrition or methodology for efficiently restoring lost skills.

This article, viewing language attrition as a sub-field of second language acquisition research, reviews several preceding researches on language attrition and takes consideration to the feasibility of applying language attrition study to the various aspects of English language education.

1. はじめに

海外からの帰国子女に対する日本語教育は、近年、社会問題になりつつあるが、反面、彼らの二言語話者(bilinguals)としての能力をいかに留めるかについての関心は薄いように思われる。いったん、学習・習得された技能が、ある期間、使用されないためにどのように低下していくかは興味深い問題であるが、このことは第2言語あるいは外国語としての英語教授・学習にも当然関わってくる問題であろう。

これまでの外国語教育の歴史は教授法の歴史であったとも言えるが、その中で学習者に与えるinputとしての教材をいかに適切に選択し、あるいは効果的に提示するかということには多大の関心が払われてきた。

これに対して、最近の第2言語習得(second language acquisition)の研究は、学習の内的習得過程に焦点を当て、特に子供の形態素習得に関しては発話の分析により、一定の習得順序が明らかにされようとしている。さらには、それが母国語を習得する幼児の第1言語習得過程と類似するものであるとする研究から、人間の言語習得には普遍的特徴があるとする仮説も支持されている。この両者の考え方は、教授あるいは習得という視点の中心に相違はあっても、言語学習を知識・技能の累積過程と把える点では共通している。ところが、いったん学習・習得された言語能力が一定期間の未使用の状態を経過するとどのように変化するのは近年、研究が始まったばかりである。従来、外国語学習において、忘れることに対しては、教師から否定的(negative)

なフィードバックが与えられることが多く、対策として反復練習による定着強化の方法などが考えられてきた。そのすべてを単純な忘却曲線に従ってとらえることが多く、忘れることのメカニズムの体系的な研究の必要性さえ指摘されていない状態である。

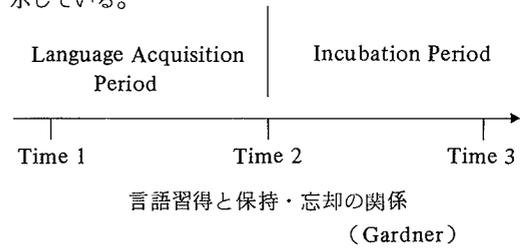
本論では、最近、応用言語学の一分野として提唱されつつある 'language loss' あるいは 'language attrition' と呼ばれる研究分野を通して、第2言語学習における忘れることの分析の必要性、また、それに関わる心理学的要因などを考察し、さらにこれまでの諸先行研究を概観した上で、この分野の外国語としての英語教育への具体的な応用可能性について考察することを目的とする。

2. 第2言語習得と忘却について

近年、顕著な進展をみる第2言語習得の研究は、人間の生得的な言語習得過程の存在を仮定し、多くの事例研究を通して、言語項目の習得順序までも具体的に提示できるようになったが、反面、それらが習得と逆に退行する場合には、言語能力のうちどの側面が減少し、あるいは保持されるのかといったプロセスにはあまり関心が払われていない。その原因として、第2言語習得研究において、多くの場合、被験者が幼児であること、さらに常に exposure が与えられること、などの特徴がある。こうした年令、環境要因を考慮すれば第1、第2言語習得の成果を外国語としての英語 (EFL) 学習へ不用意に一般化するのとは時期尚早と言わねばならない。このような研究からは、言語への exposure の欠如、学習間隔の問題による 'language attrition' の指摘は生じないが、EFL 学習においては、この分野は非常に重要である。言語学習は創造的活動であるとしても、既習事項の記憶は不可欠であり、Brown (1980: 73) の指摘するように、言語学習を習得 (acquisition) の観点からのみとらえるのではなく、いったん習得された技能がどのように忘れられていくかについて研究が行われなければならない。忘れることの結果は、誤りとして再生されるが、Ingram (1974: 266) の指摘するように、忘れることは学習者を最も困惑させるものである。しかし、誤答分析では誤りの原因は言語学的に、あるいは学習者の方略として説明され、たとえば学習者が母国語の構造で代用せざるを得なくなる前段階の忘却には何の言及も行っていない。

これまで、第2言語習得の研究において、忘却に対する指摘が欠けていることを論じてきたが、以下、両者の関係について次の3つにまとめていきたい。第1は、習得と忘れることを対立概念としてとらえる視点

でGardner (1982: 25) は両者の関係を次のように図示している。



ここで Time 1 から Time 2 までは習得期にあたり、Time 2 から Time 3 までは学習が中断されたり、言語使用の機会がない時期をさす。さらに Incubation period においては、期間内に言語能力が保持・進行する場合 (retention) と、低下する場合 (attrition) に分けられている。

第2の関係は Clark (1982: 138) にみられるように言語運用力の伸長、保持、低下をひとつの枠組みの中で 'language change research' としてとらえる視点で、attritionのみを扱うものではない。

これらに対して、第3の関係として、Andersen (1982) の指摘するような、attritionを習得研究の一部ととらえる視点がある。確かに、前述の2つの関係のように習得と attrition をプラス、マイナスの相反関係と認識することも可能である。しかし、言語の習得は (学習) → (忘却) → (再学習) のような行きつ戻りつの過程の反復であるとするれば、忘れることは広義の習得研究の一分野と思われ、両者の関係は次のような簡略モデルに図示することができるであろう。



Language Attrition を第2言語習得の一側面と位置づけることにより、第2言語習得研究の成果を適用することが可能になるが、Berko-Gleason (1982: 18-21) は次の3つの示唆をまとめている。

- ① 言語習得のプロセスに普遍性があるように、language attrition も同様に体系的である。
- ② language attrition にも個人差があり、習得研究と

同様に、性差、知能指数などとの関係も考慮されなければならない。

- ③習得に必要な input の量的・質的側面は、language attritionにも適用される。言語技能を持続するためにはどのような input が必要か、あるいはそのための指導法や指導技術への示唆が与えられる。

このように習得と忘却の関係は、習得を狭義の初期習得の段階としてみれば Gardner のモデルとなるが、より広義の言語能力習得過程としては、その下位分野という関係が成り立つものと思われる。

3. Language Attrition 研究の展開

Language attrition の研究は緒についたばかりであるが、以下ではその目的、方法論、先行調査研究、関係要因について略述していく。¹⁾

(1) 目的

Language attrition 研究は何を目的とするものなのかについて、Oxford (1982b:167) は次のように述べている。

Language loss research may ultimately tell foreign language teachers about the long-term effects of their teaching -- specifically, what types of individuals lose what kinds of L2 skills in what length of time and under what conditions.

このように忘却の過程を明らかにすることだけでなく、学習者への影響を教える側へ内省させる点で有意義なものと思われる。

(2) 方法論

方法論として最大の関心は、それぞれの言語技能がある未使用の期間を経て、どのように変化するかを測定するための測定法の開発であろう。たとえば、夏期休暇の前後に pretest, posttest を実施してその結果を比較するとしても、異なったテストを用いたとすれば信頼性に欠けると言えよう。こうした方法論上の留意点には次のようなものが考えられる。

1) Language attrition は、広義には失語症その他の肉体的損傷による言語技能の低下や、長期にわたる海外滞在による母国語能力の低下なども含むが、ここでは教室場面での第 2 言語学習における技能の低下を考える。

①調査方法(テスト)の開発

- ②予測可能な変数の把握(年齢、性、I. Q. など)
③具体的研究対象の設定(技能別、語い、など)
④調査対象集団の設定

このうち Oxford (1982a:121) は、特に language attrition 研究の前段階として、direct vs. indirect, discrete-point vs. intergrative など信頼できる技能測定法を用いることの重要性を指摘している。忘れるという現象は、その以前に理解・習得されたことを前提とするため、偶然、正答が出る可能性も考慮し、テスト法は慎重に選択される必要がある。年齢、性、第 2 言語学習体験などの変数は、調査対象の等質性とも関わるもので、EFL 学習を対象とした研究では特に問題はないものと思われる。このほか、技能別かあるいは全体として熟達度の変化をみるのかといった研究対象も決定しなければならない。この際、各技能間の低下傾向の差は、各々のテスト項目の難易度に関するため、技能別の attrition の比較は決定的なものとは言い難い。

(3) 調査研究の試み

現在まで、言語技能の保持、低下に関する研究はいくつか試行されており、以下、Oxford (1982a, 1982b) Valdman (1982) に紹介されているものを中心に略述する。

a) Kennedy (1932) : Language attrition に関する最も初期の研究で、高校の 1, 2 年生を対象にラテン語文法についての多肢選択テストを夏休みの前後に実施し、結果に 15~34% の低下があり、熟達度の高い者、2 年次生、および履習の継続を希望する学習者の方が保持率が高かったと報告している。

b) Smythe *et al.* (1973) : カナダでフランス語を学ぶ高校生を対象に(1)夏休み(3カ月)後、(2)夏休みとそれに続く未習の 1 学期(5カ月)後、の 2 つで調査を行い、夏休み後では受容技能の低下は少なく(読解で 5%)、逆に聴解では 2% の伸びが報告された。また、第 2 の研究では 4 技能について調査し、夏休み後には逆に技能が伸び、8 カ月後では低下していることから、両研究を通じて、夏休みには技能保持を助ける効果 (facilitating effect) があると推論している。

c) Cohen (1974) : アメリカでスペイン語 immersion プログラムに参加した幼児(5-6 才)の夏休み後におけるスピーキング能力およびコミュニケーション方略の変化について調査したもので、発話の平均語数が 5.2 から 3.7 に減少し、また、いくつかの言語項目について誤答率が全体で 20% から 24% に増え、その他、

言語項目ごとの使用頻度にも差がみられたという。

d) Cohen (1975) : スペイン語の immersion プログラムに参加した幼児 3 人について、前研究同様にスピーキング能力の変化を観察し、そのデータから、(1)最後に学習したことが最初に忘れられる (last learned-first forgotten)、(2)忘却のプロセスは習得のそれと逆行する (unlearning in reversed order)、(3)忘れることにより、新しい形式を試し、新たな誤りが生じる (producing new incorrect patterns)、(4)学習の空白により学習困難点が忘れられ、ある意味では学習は進行する (residual learning)、の 4 点を結論として述べている。特に(3)の指摘は、誤答分析の原因説明プロセスの前段階として language attrition の研究の必要性を論じたものと言えよう。

e) Edward (1976) : カナダの公務員採用者に英語、またはフランス語の 2 言語訓練を行い、4 技能の変化をみたところ、フランス語を学習した者 (English dominant bilinguals) は 6 カ月では変化はなかったが、1 年後にはスピーキング能力がかなり低下し、リーディング能力はやや伸びたと報告している。さらに、アンケートを通して、第 2 言語の保持には使用機会が重要な要因であるとしている。

以上の研究から Valdman (1982 : 159) の述べるように、外国語学習過程において、夏休みのような数カ月程度の学習間隔があっても文法項目、語い、あるいは受容技能には著しい低下はみられないと言えよう。これに対して Cohen (1974, 1975) のように発表技能における変化は、誤り、発話の長さ、より簡略な伝達方略の使用など、注目すべき点が多い。このような結果から、教師が夏休み後の指導は厄介であると考えるのは 4 技能すべてには該当せず、むしろ学習者の態度面からの影響が大きいのではないかと考える。

これまでに述べた諸研究は、調査方法として客観テストを使用したものが多いが、学習者は自分の外国語技能の変化をどのようにして認識しているのであろうか。ひとつの例として、筆者は海外留学経験者 20 名余りに帰国後の技能低下の特徴についてアンケート調査を行った。これは主観的な判断であるが、次のような調査結果が得られた。

- ① speaking 次いで listening の力が早く低下する。
- ② speaking に関連する下位要素のうち、特になめらかさ (fluency)、生活関連の発表語いの低下が早い。
- ③ reading, writing の力は帰国後も保持されている。

Language attrition に関する研究はこれら以外にも数多く行われており、忘れることのプロセスが技能別に異なることが確認されている。今後、教師からの働きかけなど、忘れることへの関連要因を明らかにしていく必要がある。

(4) Language attrition に関わる要因

調査研究の結果を受けて、それらに関わる要因について心理学的要因および社会的要因について考察していきたい。

a) 心理学的要因

心理学的要因として language attrition に最も深く関わるものは記憶に関する諸要因であろう。言語のような意味材料の忘却も一般的な記憶の保持曲線に従うと思われるがそれに関わるいくつかの要因が考えられる。たとえば、外国語学習におけるの干渉は、誤答分析によれば、母国語あるいは目標言語規則によるものが考えられているが、このようなヨコの関係に対して、前時の学習が後の記憶を妨げる順向抑制 (proactive inhibition) や、逆に後の学習により前の記憶が妨げられる逆行抑制 (reactive inhibition) のようなタテの関係も誤りの原因説明のための要因として考慮に入れなければならない。このほかにも、練習の量、学習間隔、教材の提示法などのような外的要因や学習動機の強さによる定着力の差や、年齢による機械的記憶と論理的記憶の優位性、学習態度、性格などの内的要因も関係してくるものと思われる。また、忘却過程と習得過程の関係についても、両者は逆行するとする考えや最も効果的に習得されたものが最も記憶に残るとする立場など、今後の心理言語学的研究の成果に解決を待つ分野が多い。

b) 社会的要因

教室場面における英語教育においては、英語の使用機会の頻度を除けば、社会的要因はあまり重要であるとは言えない。二言語使用に関して Gardner (1982 : 27) が Edward (1977) の研究を引用しながら、第 2 言語の保持には使用の機会と、その言語の話者が社会に対する態度も大きな要因になるとしているが、EFL 学習においてはそこまでは関わらないであろう。しかしこのような社会的要因が language attrition の心理学的側面にどの程度、影響を及ぼすのかは興味深い問題である。

4. Language attrition 研究の TEFL への応用可能性

これまでの language attrition に関する諸研究の指摘は、どのように英語教育へ応用されるのであろうか。忘れることの研究がさらに進み、学習のプロセスにおける忘却のメカニズムが把握できれば、学習終了後の知識・技能の忘却、保持についての予測や、指導法、学習環境と忘却の関係についての理解、または、忘れた技能を回復させるのに最も効果的な方法の開発、など、教師にとって重要な関心事への手掛りを得ること

ができるであろう。Language attritionの応用について Valdman (1982 : 155) は、次の4点について重要であると述べている。

- ①教育目標の選択・決定
- ②指導順序からみたカリキュラム・シラバスの検討
- ③教材編成
- ④指導過程の検討

(1) 教育目標の選択・決定

どのような技能の修得を重要とみなすかにより、それにかかる時間配分が決定されるが、どの項目が忘れられやすいかもそれに対する指導の量的重みづけに関わってくる。使用機会が保持を促進するという研究成果から、指導上の重点目標と、授業分析による授業の量的な実態を調査することは第一歩となるであろう。たとえば、ライティングの指導を全く行わないで、書く力が低下したことを学習者の努力不足と理由づけるのは不合理であろう。また、一般に受容技能の保持率が高いことは、理解中心のアプローチを支持するものと思われる。

(2) カリキュラム・シラバスの検討

伝統的なカリキュラム・シラバスにおいては、言語学習は継続的蓄積のプロセスととらえられてきた。それによれば、指導は忘れた項目の復習・定着に始まり、次のプロセスへと続いていった。学習には、常に忘れることが伴うものであり、らせん状のシラバスにより、それぞれのステップが最終的目標となるような構成も考えられる。その例が概念・機能シラバスであり、構造、場面シラバスでは不可能な、語いや構造の反復提示が可能となる。また、学習間隔についても、記憶保持・忘却と学習後の時間の関係が明確に証明されれば授業時間数と修得の度合いの関係がより説得力を持つものとなるであろう。

(3) 教材編成

教材の編成においては、現在では伝統的な構造アプローチが中心を成している。最近、コミュニケーション・シラバスが提唱されているが、教材の編成では試みが始まったばかりである。構造シラバスでは、復習に際しても、文法構造が中心となり、それによる機能など意味的な側面までは考慮に入れられることが少ない。構造よりも意味の方が保持され易いかは未知であり、今後の language attrition の研究においては、意味と構造の忘却率の相違なども明らかにされなければならない。

(4) 指導過程

忘れることの原因は、言語的要因、学習環境ばかりではない。教師の指導法によって記憶の持続に影響が生じる場合もありうる。たとえば、ある項目を提示した直後に、類似した項目を提示すれば、一方の記憶が他方の記憶を抑制し、片方が忘れられたり、あるいは新たな誤りが生じることも考えられる。多くの英語教師は経験により誤りの生じやすい箇所や学習者にとって覚えにくい、あるいは忘れられやすい箇所を熟知しているはずであり、その経験を指導過程に生かしていくことが必要であろう。また、それをもとに、学習を終了した者への再履習コースの開発も可能になってくるであろう。

Language attritionの研究は、英語教育のさまざまな側面に関わるものである。これまで、忘れることは誤りと同様に、教える側からは否定的にとらえられることが多かったが、'To forget is human.'であり、言語習得は学習・記憶と忘却の反復であることから、より寛大な態度が望まれる。また、忘れることにも、そのプロセスには興味深い特徴の存在が確認されており、従来のinputの内容・提示法から教授の効率化を考える proactiveなアプローチに対して、いったん、intakeされたものがどのように忘れられるかを分析することにより、その成果を指導に生かして効率化をはかる reactiveなアプローチも習得の一分野として考えなければならない。

〔 参 考 文 献 〕

- Andersen, R. W. (1982), "Determining the Linguistic Attributes to Language Attrition," Lambert and Freed (eds.) (1982: 83-118).
- Berko-Gleason, J. (1982), "Insights from Child Language Acquisition for Second Language Loss," Lambert and Freed (eds.) (1982: 13-23).
- Brown, H. D. (1980), *Principles of Language Learning and Teaching*. Englewood Cliffs: Prentice-Hall, Inc.
- Clark, J. L. D. (1982), "Measurement Considerations in Language Attrition Research," Lambert and Freed (eds.) (1982: 138-152).
- Cohen, A. D. (1974), "Culver City Spanish Immersion Program: How Does Summer Recess Affect Spanish Speaking Ability?," *LL*, 24, 1, 55-68.
- _____ (1975), "Forgetting a Second Language,"

- LL*, 25, 1, 127–138.
- Edwards, G. (1976), "Second-Language Retention in the Canadian Public Service," *CMLR*, 32, 3, 305–308.
- Gardner, R. C. (1982), "Social Factors in Language Retention," Lambert and Freed (eds.) (1982: 24–43).
- Ingram, E. (1975), "Psychology and Language Learning," J. P. B. Allen and S. P. Corder (eds.) (1975), *Papers in Applied Linguistics*. Oxford University Press, pp. 218–290.
- Lambert, R. D. and B. F. Freed (eds.) (1982), *The Loss of Language Skills*. Rowley: Newbury House Publishers, Inc.
- Lowe, P., Jr. (1982), "The U. S. Government's Foreign Language Attrition and Maintenance Experience," Lambert and Freed (eds.) (1982: 176–190).
- Oxford, R. L. (1982a), "Technical Issues in Designing and Conducting Research on Language Skill Attrition," Lambert and Freed (eds.) (1982: 119–137).
- _____ (1982b), "Research on Language Loss: A Review with Implications for Foreign Language Teaching," *MLJ*, 66, 2, 160–169.
- Papalia, A., and J. Zampogna (1972), "An Experimental Study on Teachers' Behaviors and Their Effect on FL Attrition," *MLJ*, 56, 421–424.
- Smythe, P. C. *et al.* (1973), "Second-Language Retention Over Varying Time Intervals," *MLJ*, 57, 8, 400–405.
- Tucker, G. R. *et al.* (1976), "Affective, Cognitive, and Social Factors in Second-Language Acquisition," *CMLR*, 32, 214–226.
- Valdman, A. (1982), "Language Attrition and the Administration of Secondary School and College Foreign Language Instruction," Lambert and Freed (eds.) (1982: 155–175).